

メタファーの諸相

能 登 恵 一

初めに「ミュンヘンの人口は百万である」(1)と「あの人は猪だ」(2)そして
チョムスキーの有名な例である“Colourless green ideas sleep furiously.”
(3)のこの三つの発話を考えてみることにする。この三つの発話はその町、あ
る人物そしてある観念について表示し、その対象を表象している。どの発話
もそれぞれ主題に対する情報を提供しているのだが、その情報に対する受け
手の認識は一様ではない。(1)は当該都市の人口の数字に関する内容の真偽に
ついての発話であり、その認識的意味においてこの発話を巡って発話内容そ
のものがそこで表わされた数字の真偽以外のところでそれ以上取沙汰される
とは考えにくい。これに対して、(2)の発話では多様な解釈が考えられる。た
とえば、その人物が芝居などで猪の役を割り当てられていたり、絵を描いて
いて、それが猪の絵であったり、あるいはレストランで注文したものが猪鍋
である、といったような種々のコンテキストが与えられているのであれば、
その内容を巡る真偽に関わる発話ということになる。だが、そのような発話
の指示条件を備えていないところで、等該の人物について「あの人は猪だ」
という発話がなされた場合には、その「人物」は[一人間]、ここでは[+動物]
であるということになり、この表現形式とその意味内容は明らかに意味
論上の違反を侵した発話、つまり記号の指示対象間における不一致ないしは
表現内容が矛盾性を孕んだ発話ということになる。「あの人は猪だ」というと
き、この発話全体と共起する場面にその指示する条件が満たされていないの
であれば、この発話はその認識的な意味には全く関与していないことになる

わけである。しかしそれ故にその意味論上の違反を侵した発話の意味が送り手の発話意図に対する受け手の解釈の意識にある種の働き掛けが作用するとき、すなわち、ある一つの発話が意味論上の破格でありながらもその発話内容に何らかの有意性が直感的に認められる場合、受け手はその記号の解釈を余儀なくされる。しかし発話(3)にいたっては直感的にそこに有意性を認めるのは容易ではない。

言語記号の論理的機能という観点からみれば、その機能は意味的機能ないし表示機能に代表される。一般的な言語使用にあつては言語記号は情報伝達機能として直接的、一義的な役割を果たす。しかし言語記号には間接的、非本来的使用としての美的機能が備わっていることはすでに認められているところである。発話(2)と(3)についてはその記号の指示対象をシンボルとしての記号にではなく、言語外の事象、パースの言うところの虚構の対象にかかわる言語のアイコンに求めることによってそれらの発話の有意性が得られる。パースの言うところのアイコンとは、対象を同じ様に対応させるか、あるいは模倣することによって指示する記号である。従つて、アイコンと対象は共通の特徴を持たなくてはならない。とすると、(2)の発話はそれを意味論上の破格としてとらえれば、「猪」は獲物を求めて直線的あるいは鋭角的な走り方をする動物で、「当該の人物」の行動様式は直線的あるいは鋭角的であり、その点にこの「人物」と「猪」の共通の特徴あるいは類似性（いわゆる比較ないし共通の第三項）が客観的な基礎をなし、それに基づいて「猪」の概念の関係が「人間」の行動様式へと転用され、その結果(2)の発話は転移の意味で理解されることになり、メタフォーリックな働きの発話とみなされるということになろう。発話(3)においても同様に考えることができよう。つまり、「眠る」は〔+生物〕の意味論的特徴を有する動詞で、主語「観念」は〔-生物〕〔+抽象〕であり、ここに意味論上の対立と違反が生じている。この発話を有意味なものとしてみなそうとするなら、「観念」は〔+生物〕としてとらえなくてはならない。さらに、形容詞「無色」と「緑色の」そして動詞「眠る」と副詞「激しく」にも共に〔-色彩〕：〔+色彩〕，〔+静〕：〔-静〕という意味論的対立と違反がみられる。「無色の」と「緑色の」については〔±色彩〕で

はなく、転移的な意味で、そして「眠る」と「激しく」においても〔±静〕としてとらえるのではなく、ダイナミックに非本来の意味を付与することが必要になる。このように意味論上の逸脱に言語の美的機能を認めることによって本来「無意味な欠陥を持つ」発話を有意義な発話、つまりメタフォリックな発話に仕立てあげることが出来るのである。

とりわけ共感覚表現においても上に述べたような心的な作用である比較が、それが何に関しての比較であるかという、いわゆる比較の第三項による説明原理によって多くのメタファーが解釈されることが多い。ランボオの詩「イルユミナシオン」の一節に「深紅の香り」(4)という表現がある。この表現は「香りが深紅である」に変形できる。しかしこれは(2)におけるように、「香り」と「色」の間に共通の第三項を見つけるのは容易ではない。それぞれの構成要素間の相違は大きく、その要素間の関係は意味論的レベルにおいて相互に否定しあっている。それではこの共感覚表現にあってはそのアイコンをどのように考えてゆけばよいのだろうか。(2)と同じように比較の第三項に依拠して考えれば、「深紅」という語の指示条件を満たしているもののある部分が意図された意味のアイコンをなす、つまり「香りは真っ赤な色を帯びたような物」ということになり、メタファーとしての解釈が成り立たず、一層不都合である。色彩を表わす語「深紅」についていえば、その指示条件は多くの下位部分から成り立っているものではない。しかしアイコンがないというのでは決してない。もしアイコンがないのならランボオはこの語を選ぶ必要はなかったであろう。わざわざ「深紅」というこの形容詞を選んだのだから、そこになんらかのアイコンがあると考えざるをえない。ここで問題になるのは臭覚の「香り」ではなく、あくまでも視覚の「深紅」という語である。香りが「深紅」であって、その他の色彩語であってはならないのである。ある記号が選ばれるにあたってはその当該の記号は他の記号を排除しているのである。とすれば、「深紅の香り」の「深紅」が何であるかを考えなくてはならない。それは深紅と思われる有り様を導き出すことにほかならない。「深紅でない香り」は「深紅の香り」に比べれば、その香りは当然何らかの程度においてわれわれの臭覚が氣にとめざるをえないような性情のものであることがわかる。ところ

で「赤い」は「明るい」に通じる。それに「深み」が加わるのだからその明るさの程度は甚だしく強いものであるといえよう。このように考えてみると「香り」と「深紅」とによって共有されている特性が「深紅の香り」という発話によって意図された意味のアイコンをなしているというように考えることが出来る。とすれば、ここでの可能な答えは「かなり強烈な香り」とでもいう風に解釈できよう。

ここでさらに二つの発話「犬が吠える」(5)と「数学が吠える」(6)を考察してみよう。(5)、(6)とも文法形式としては容認される。しかし(6)は意味論的にみればやはり破格である。ここでは動詞と名詞の意味論的、統語論的特徴がぶつかりあい、両方の語彙素の折り合い、ないしは結び付きが否定されるのである。動詞「吠える」は[+生物][−人間]という特徴を備えた名詞を主語として要求するのに対して主語の「数学」はそれとは矛盾した特徴[+抽象]を示すからである。数学は科学である。つまり自分の意志をもたない対象として観察されるべきものである。ところが(6)では[+抽象]という性質の「数学」が自分の行動とかかわって「吠えて」いる「生きもの」として表わされている、と考えざるをえない。結局この発話のテキスト内的意味と効果は、科学である数学が、動物や時には人間と結ばなくてはならない動詞と結合されて、科学がまるで動物のように声を出し、あるいはどこかに勝手に走り出していきそうだと感じさせるところにあるといえよう。意味素性が全く違うはずの主語と述語が敢えて結びつけられ、その結果として類似性が感じとられるのである。このように二つの指示対象の並列が意味論的な矛盾ないしは不一致が知覚された場合、つまり共に両立しえないコンテストに互いに矛盾ないしは対立する要素を置くという、ヴァインリッヒが言うところの意味論上の逆の限定がなされているわけで、それがメタファー発生の一歩というとも言えよう。

ところでメタファーは言語記号そのものとして知覚された記号以外の何ものでもない。記号とは概略、認識の基礎をなすもので、それにより人間は思考内容を言語化することが出来る。そして記号は現実あるいは事物を代理し、それが表示され、それによって、記号の受け手は当該の記号内容を理解また

は解釈する。普遍的にみれば、記号はそれによってある現象あるいは事物が存在しているか、あるいは生じるかの認識を起こさせる機能を持つ。これには当然表示しているものについての理念と表示されているものについての理念が含まれる。このように記号が記号として機能するには少なくとも三つの要因が必要とされる。全ての記号はそれが指示する対象に対する代替機能を持ち、これらの記号と対象との間の関係は「指示」によって保たれ、この「指示」は記号の送り手と受け手の共通基盤に立った認識において理解され、これによって記号はその記号としての機能を果たすことが出来る。先の発話(1)～(6)における記号はそれぞれ完全な記号として機能し、(1)と(5)では認識的なレベルでそして(2), (3), (4)そして(6)では様々な様相においてそれらの発話を有意味に成立させている。ある種の発話がメタファーとして解読されるのは従ってその陳述の記号が受け手によって送り手の意図通りに、そしてときにはそのコンテクストを手掛かりにしながら理解されることによるといえよう。メタファーは言語記号そのものとして知覚されたものであり、記号として発せられた命題の事実性と記号、つまり命題そのものの中に示されているのである。そしてその命題が限定的対立、矛盾を示すとき、それがメタファーを作り上げることになる。記号はそれが記号として機能するとき、必ずしも記号そのものに依存するのではなく、状況に依存する。つまり、記号はそれが置かれた内的・外的な周囲に規定されており、その記号が何を表現し、指示し、あるいは叙述するのかによって規定され、そこにメタファー発生の要因が見い出されることが多いといえるのかもしれない。

すでに発話(2)において明らかになったことだが、次の(7)および(8)の発話にもみられるようにメタファーは真偽という観点から文字通りにとらえれば偽の発話である：「ソフトタイプが従来型の分を食って、伸びることになる」(7)「ことごとく人の意に逆らうゴルフボール。それでもやめられなくて。爆笑ゴルフ人間学」(8)つまり意味論上の選択制限の違反が侵された発話にあっては文字通りの解釈が否定され、有意味な発話としては解釈できないという点にある。しかしながら単なる言葉の選択の間違いとして捨て去られずに解釈が試みられる。そしてその明らかに偽であるというところに依拠してメタ

ファーは成立するのである。ただしそのメタファーを見つけだすことは受け手の課題であり、それが見つけられたときメタファーは解読されたということになるわけだが、このようなその発話の真偽が直感出来るようなメタファーである場合はその転移的意味あるいは意味論上の選択制限違反をメタファーそのものに求めることは比較的やさしい。いくつか転移的意味でのメタファーの例を挙げてみよう：「永田町に電撃的ニュースが走った」(9)「大きく変わり行く世界のホットなテーマである社会主義間の問題を中心に、白熱した論議が期待される」(10)「ロシアと朝鮮民主主義人民共和国の扉が開いた」(11)「政府は不透明な金について不問にした」(12)「政治に揺れた富士山丸」(13)「日本が国際国家へ脱皮するチャンス」(14)このように日常言語にあってはメタファーを使わない言語表現が成立しにくくなっているほどにメタファーは日常卑近な言語現象であり、必ずしもメタファーがメタファーとしてとらえられなかったり、死んだメタファーとしてしか受け止められなくなっていることも事実である。

このようにメタファーの成立条件としては意味論上の選択制限違反と転移的意味がその要素として考えられるが、必ずメタファーはそれらの要素で成立しているわけではない。「あの男は泥沼に落ち込んでいる」(15)という発話を例にみてみよう。これはこの字句通りに解釈したとしても何の意味上の選択制限違反もなく、たとえば例(3)にみられたような一見しただけでも「無意味な欠陥文」でもない。しかしそれでもこの発話がメタファーとして意図されている（つまり、その場所にあるいはその発話のコンテクストに現実の泥沼がない、すなわちこの発話の共起場面が欠如している）ときには、受け手はその発話内容の解釈にあたり記号内部の意味にとどまることは許されず、記号の外にその意味を求めざるを得ない。そうしなければ、この発話の有意性、つまりメタファーとしての送り手の意図は成立しないことになる。とすればメタファーにあっては、とりわけその記号は言外の意味に差し向けられるわけであり、すでに明らかな通り、記号のレベルで始まるメタファーは言語外の事象とコンテクストとによって支えられた言語現象であるといわなくてはならない。送り手の意図そのものを受け手はその記号の背景に探らねば

ならないのである。ということはメタファーはまさしく単に統語論や意味論のレベルではなく、テキストのレベルで、さらには語用論の領域で考察されなければならない言語現象であるということになる。

語用論とは一言でいえば記号の使用者と記号との関係を扱う部門で、ある一定の発話がどう解釈されるかという問題が問われる。たとえば次の二つの発話をまず考えてみよう：「泣くのをやめなさい」(16)「この犬は噛まないよ」(17)一方が命令文で、他方は叙述文であることは明らかで、この両者は一見したところ何の共通性も持たないように見える。しかしこの発話はある一定のコンテキストに置かれると、その意味するところがある種の共通性を有することになる。すなわち、子供が遊んでいるところに一匹の犬が走り寄ってきて、飛びついた。その子供は驚いて泣き出したが、そこに犬の飼い主がやって来て(16)を発話したとする。それは当該の犬については飼い主は危険がないとみなしており、それを子供は了解すべきで、いつまでも不安に泣き叫ぶのは的外れなことだ、いったような内容を含意するものである。表現形式は叙述文で、一見すれば犬の性状について何かを語っているようでありながらも、その発話は(17)と同じように要求ないし命令を言外の意味として含んでいるのである。(=発話内的行為)そして子供がその犬は危なくないということを受容して、泣くのを止めてじゃれつかせれば、飼い主の発話、つまり送り手の発話意図は受け手においてその意図通りに受け止められたということになる。(=発話媒介行為)この例が示しているように、一言でいえば、発話内的行為はある発話が直接的な指図、命令という統語論的形式を備えていなくとも、発話者の意図はその「指図」にある、というところにその大きな特徴がある。(17)は叙述文でありながらも犬についての何らかの主張をしようというのではない。発話内容そのものではなく、その言語的背景が問題なのである。ここではその背景は「指図」である。メタファーについても同じことが当てはまる。メタファーを使って何か特別な主張がなされるとみるのは適切でない。たしかにそうした主張にはある種の発話内的な力が伴うが、それは決して主張のそれではない。むしろそれは「示唆的」とか「勧告的」と呼ぶのにつかわしい力である。たとえば「あの人は猪だ」の働き

は「その人物を猪と見なしなさい、そうすればその人物の行動様式がはっきりと理解出来るでしょう」と、聞き手に勧告することなのである。とするとメタファーの特性は、表示している記号を通してその記号そのものが表示していないものを呼び出すというところにあるということもできる。

よく言われているように記号がその限定的意味を持つのはコンテキストによるものであり、そして記号が記号として機能して理解されるためには、すべての記号はそれをとりまく一定の状況と結びついていなくてはならない。それぞれの状況がある記号を生ぜしめるのだが、その記号は当然その内のおよび外的なコンテキストに左右されるのである。つまり記号がかかわる状況はつねにコンテキストに依存した状況なのである。すなわち、それぞれの語はひとつひとつ切り離して、単独で使われているのではない。個々の語の意味は常にテキスト内の他の語との関連ならびに対立的限定において個々の語の意味が成り立ち、その意義はコンテキストの内容と状況に応じた可変性を持ち、それでいて精密化され、意味的拡がりには縮小され、相対的に狭くなった意義となる。これはまさしく意味論としては基本的なことだが、それと同じく全く基本的なこととして、相対する意味素の使用という言語の美的使用による発話がメタファーとして認識されるのはすでに述べた通りであり、メタファーは孤立した現象ではなく、生きた現実の談話と共に表われるものであって、常にコンテキストの影響を受けるか、ないしはコンテキストに依存するのである。そしてメタファーは逆説的で、矛盾したものである。前述のいくつかの例にもみられた通り、言語はまさしく色褪せたメタファーの集合体の様相を呈しており、メタファーがその本来的機能を果たすには、受け手がその発話に孕まれた矛盾性に否応なく意識を抱かざるをえないようなものでなくてはならない。そのとき初めてそれはいわゆる「生きのよい」メタファーとなるのであろう。たとえば、「音楽を見る」(18)というとき、その「音楽」の意味野を音響範囲としてとらえるのであれば、その内的構造の対立的限定は大きいといえるかもしれない。しかしこれが「レーザーディスクの登場による音楽を見る時代の到来」(19)のようなテキストに置かれた場合、もはやその矛盾性は失われ、メタファーとしては受け止められなくなるであろう。

(18)にみられた対立的限定は消失するのである。メタファーは本質的にコンテキストに左右されるのである。メタファーは日常使われる語と異なり、決してコンテキストから切り離すことができないのである。

先に述べた通り、語の意味素性という観点からメタファーはある語の意味素性が他の語の意味素性の条件を満たさない意味論上の破格、つまり意味論上の選択制限に違反した発話とみなされることが多いという考え方がメタファー成立の要因として考えられ、さらにこれもすでに触れたように、従来メタファーは類推、相似および類似性によって表わされると考えられてきたのだが、むしろメタファーが効果をあげるのは本来の語と転移された語（たとえば形容詞blondに内在するメルクマールは[+sichtbar], [+Farbe]であり、その転移的メルクマールは[+an Haar gebunden]である）の類似性という共通の第三項によってではなく、むしろそれら両者に共通しないものによってメタファーはその効果を得るというふうに捉えるほうがメタファーの本来の働きをきちんと把握出来るだろうし、またそれによってメタファーがいわゆる「生きた」メタファーとしての働きをなす、とヴァインリッヒは指摘している。つまりメタファーの思考が、上に述べたような形式的類似という共通の第三項を支えとしながら作られているというよりは、逆に類似はメタファーによって作り上げられるというのである。ツェラーンの「死のフーガ」の冒頭に出てくる「黒いミルク」(20)におけるメタファーはたとえば「悲しいミルク」(21)に比べその効果は大胆であると言う。つまりミルクは決して悲しいものではないが、精神的な事柄の意味野が広いため対象間の隔たりは小さく、しかもそれにより意味的対立は生じない。そのため(21)は受け入れられやすく、もはやメタファーとしては成立しにくいといえるものであろう。(楽しい食事であれば悲しい酒も日常的である)しかし(20)の形容詞と名詞は共にその意味はそれぞれ語そのものとして限定しあって、意味的対立をなしている。このメタファーの隔たりは小さく、受け手にその表現内容に対する真偽についての疑問を起こさせる類のものであり、受け手はその関係が近い対象を並べて、一致する性質を判断せざるをえない。ツェラーンが「黒いミルク」というのだから受け手はそこにメタファーの類似性をみなくては

ならないということになる。

メタファー混じりの発話はすでに明らかな通りどれも文字通りにとれば「欠陥を持つ」ような発話である。その「欠陥」は、偽（構成要素間の隔たりあるいは相違という意味での偽も含まれる）、矛盾、テキスト内での意義価の逸脱をなす対立的限定、会話の規則違反などである。そこで、もしもこうした意味での「欠陥」が当該の発話に見てとれる場合に、受け手はその発話そのものの表層に現われている意味とは別の発話の意味、送り手の発話意図を別の所に模索しなくてはならぬ。チョムスキーはじめ多くの言語学者が、統語論的にはいわゆるウェルフォームである発話が、意味論的には異例な逸脱したものであっても、そこに適切なコンテキストが与えられた場合にはメタファーとして機能する、と指摘している。したがってメタファーはあらゆる考えうるコンテキストによって有意性が与えられる発話であり、その解釈は受け手がコンテキストを手掛かりにその有意性を見付け出す作業にほかならないといえよう。